

キックオフイベント オンラインセッション開催報告

イベント名 共催シンポジウム1：計量テキスト分析と社会科学

開催日時 6月20日 12:00～14:00

登壇者など

【座長】

小塚 真啓(岡山大学)

大賀 哲(九州大学)

【演者】

仁平 典宏(東京大学)

加藤 朋江(福岡女子短期大学)

大賀 哲(九州大学)

【討論者】

中藤 哲也(中村学園大学栄養科学部)

参加人数 67名

報告内容

近年、とくに社会科学の中で、大量のテキスト・データをコンピュータで解析する「テキストマイニング」が注目されている。同時に、従来の社会科学で行われていた質的分析とテキストマイニングを統合させる「計量テキスト分析」についても研究上の知見が蓄積されてきた(※)。また、テキストマイニング／計量テキスト分析は、特定の分野・領域の文書に精通している研究者と、解析方法・方法論に精通している研究者が協働することで、体系的かつ精緻な分析が行われるため、異分野融合研究に適している。また、JAASが目指している、分野・組織・職種・職階の垣根を越えた「協働」や「対話」とも親和的である。そこで本セッションでは、九州大学アジア・オセアニア研究教育機構(QAOS: <https://q-aos.kyushu-u.ac.jp/>)と共催で、社会科学の中での計量テキスト分析の意義について考察した。仁平報告では企業報告書における「持続可能性」、加藤報告では原発事故報道における「リスク」、大賀報告では政治家のスピーチにおける「対外イメージ」をそれぞれ事例として、計量テキスト分析の意義を検討していた。

フロアとのディスカッションでは、さまざまな論点から質問・コメントがなされた。そのすべてをここで紹介することはできないが、(1)計量テキスト分析の方法論上の意義(発見・探索方法の意義)と、それをを用いて明確になった各分野の知見(発見・探索された結果の意義)を分けるべきではないか、(2)KH Coderが便利に流通することによって、KH Coderの仕様に合わせた分析ばかりになっているのではないか(分析の多様性が失われ、似たような分析手法ばかりが採用されている)、(3)テキストマイニングは、高頻度語を中心に分析することになるので、「低頻度だが重要性の高い語」が分析から除外されてしまう(低頻度語の重要性を評価するための方法が必要ではないか)など、有益なコメントが寄せられた。計量テキスト分析は、異分野間の研究だけでなく、組織・職種・職階の垣根を越えた「社会連携」を進める上でも、協働や対話を進める重要なツールとなりうるものである。今後は、JAASの行動指針(Value)との関係で、計量テキスト分析を活用していくことが考えられる。

※ 講学上、「テキストマイニング」とは、コンピュータなどを用いて特定の文書群を抽出し、その上で多変量解析など統計的手法を活用して探索的な分析を行う方法であり、「計量テキスト分析」とは、テキストマイニングの解析結果に質的な分析を加える、または量的・質的分析を統合した方法で当該文書进行分析するという方法である(樋口耕一『社会調査のための計量テ

キスト分析』ナカニシヤ出版、2014年、第1章；内田諭・大賀哲・中藤哲也「知を再構築する—異分野融合研究のためのテキストマイニング」ひつじ書房、2021年、第3章）。